

して、いかに苦勞をしたかが語られる。「このきびしい寒さの中、〇〇カメラマンが頑張って撮影してきました」とか、「時化で10日間もこの島にとじこめられました」という調子である。エベレストへでも行ってきたならともかく、この程度のことは、自慢にも手柄にもなることではない。その作品によってその土地の何を伝え得たかが問題なのであって、その土地に辿りついたことでも頑張ったと賞められたのでは、果たして対象にどれだけ頑張ったととりついたかを疑いたくなる。寒かろうと時化になろうと、それはその土地の人たちが、日常の中でいくらかでも直面するレベルの問題である。金と装備と組織のうしろだてのもとに仕事をしている人間のいうこととしてはあまりにも子供っぽいというべきであろう。この程度の苦勞話は、せいぜい同僚と一杯やりながらかわすのがいいところではないだろうか。

もちろん、伝えたい対象をより鮮明に位置づけるために、介在者がそこでどのような状況におかれたかを材料として利用する手法はあるであろう。これは、その苦勞を前面に出すことによって作品の出来具合を割り引いてもらおうというものではないはずだし、またこれが安易

に用いられると、その作品が、果たして対象を語っているのか、作者を語っているのか、本末転倒になるおそれがある。

日本人の外国旅行記には、むしろ語り手としての自分を前面に出したものが多い。そしてそれが結構共感を得ているようである。よく読んでみると、その土地を語っているようで、実はその土地における自分を語っているのである。私小説がひとつのジャンルをなす日本文化のあらわれが、ここにもある。他への関心よりも、自分への関心がどうしても優先するのである。

私はかつて、「地理学は他人に対する関心から育ってきたが、日本にはそのような関心がうすい」という意味のことを教わったことがある。私たちがどこかの土地について語るとき、その土地における自分を語ることを超えて、その土地の何を語り得たかということを、いつも反省する必要がある。その土地に存在する事物は、その土地におけるさまざまな事物とかわりを持って共存しているのであり、そのものが単独で語り手とかわっているのではないからである。

(早稲田大学)

## 郷土の森

宮 脇 昭

生態学的、生物地理学的な研究対象として、裸の大地を被っている緑の植衣、植生を扱う場合、最も身近にあり、調査が容易なのは雑草群落である。雑草は日本の畑地雑草 302 種類、水田雑草 92 種類、また路傍や都会の空地の雑草群落を見てもそのほとんどは外国から入ってきた ネオフィーテン Neophyten といわれる帰化植物である。したがって、我々が海外調査にヨーロッパ、南北アメリカあるいは東南アジアなどに出かけて調べると、その土地本来の自然林はまったく日本の植生とは異なっている。しかし、きびしい人間の影響下にある、絶えず人に踏まれる路上の敷石の間のギンゴケツメクサ群落、また繰り返して除草されている畑のハコベ、メヒシバ、イヌビエなどの好窒素性の一年生雑草群落、路上のオオバコ、カゼクサ、ニワホコリなどの踏跡群落は、北半球どこへ行っても全く同じである。我々が海外で疲れたとき、あるいは全く日本の景観、ふるさとの緑とは異なった所で足もとに眼をやると、そこには日本の各地で生まれ育った頃からいつも身近に生育していたオオバコ、スズメノカタビラ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、また蔽密には種

類が違うがヨモギなどは北半球さらには南半球の大部分の文化景観域で見られる。

したがって、我々は、取っても、取っても生える畑の雑草、“ふまれてもしのべ道の草”といわれるグラウンドや路上のオオバコ、オヒシバ、スズメノカタビラなどは最も強い植物の代表のようにいわれている。しかし、地球上の生物社会では最も強そうに見える植物は、実はほんのわずかに環境のバランスがくずれたときに、すぐに駄目になる弱い面をもっている。ふまれてもしのべ道の草のオオバコ群落は実は踏まれるから生育できる。土がなくなっている一面的で極端な、きびしい条件下では、その土地本来の自然植生、例えば日本列島の照葉樹林の海岸部のタブノキやシイノキ、内陸のシラカシ、イチイガシ、アラカシのような照葉樹林は芽生えることも出来ない。

反面、オオバコ群落はもし、人間が踏むのをやめたとたんオオバコより、踏まれないよりよい条件で競争力の強い路傍のヨモギ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギそして、2〜3年たてばススキ、チガヤ、クズに、

10年たてば関東地方ではクヌギ、コナラの雑木林、80～100年たてば武蔵野台地ではシラカシの照葉樹林に遷移してゆく。もう踏むのやめて1年たったオオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ群落の中では、あれほど強かったオオバコやスズメノカタビラは姿を消してしまう。日本の農民の長い間の性といわれるような夏の水田の田の草取り、あるいは梅雨期以降あつというまに畑地を被ってしまうメヒシバ、ハコベ、イヌビエなどの雑草群落は、もっともやっかいで、手ごわい相手である。しかし、それは農民が畑をたがやし肥料をやり、作物を作り、除草をしている限り数100年間も嫌がられながらも、農民と共存してきた。作物は毎年植えかえなければならなかったが畑の雑草は草を取り、肥料をやる限り畑の主として存続してきた。水田も同様である。もっとも生態学的に

確実な畑の雑草、水田雑草を完全に除去する方法、それは草をとるのをやめること、耕作を放棄することである。あれ程農民を困らせている畑の雑草も管理を放棄して、半年ないし1年たてば夏は25日～30日で芽が出、生長し、花を咲かせ、実をみのらせて一生を終る短期1年生畑地雑草から生活環が180日以上にかかる越年生の路傍のオオアレチノギク、ヒメムカシヨモギに代る。さらに1～2年放棄したままでは多年生のススキ、チガヤ、クズなどの草本群落に代る。そしてあれほど農民を苦しめていた畑の雑草はまったく姿を消してしまう。

雑草群落の動態こそ、植物的自然と人間活動との様々ななかかわりあい、相克の縮図といえよう。

(横浜国立大学)

## その名は親泊千代

和田 明子

私がベルギーの地域開発とその経済地域構造について、講義の一端を担当したのは、昨年10月下旬からでした。講義をおえたある日、「非常勤の方は、かならず“お茶の水地理”に随筆をおよせいただくことになっているのです」という編集委員のお話でした。あれこれ考えたすえ、やはりこのことは、ぜひお伝えしたいと、一筆加えさせていただくことにしました。

1947年の春、私は東京女子高等師範学校の文科に入学しました。東上線の大山駅から、女高師寮までは一面の焼野原で、寮が駅から手にとる近さにおもわれました。当時は終戦直後、伝統的な全寮制のなごりのために、クラスのはとんどの方が寮生でした。全国各地から集った才女たちは、それぞれに郷里の生活ぶりを披露し、誇らかに語りあったものでした。

奄美出身のMは、戦前に鹿児島に疎開したままで、いつ大島に帰れるのかわからないと嘆いていました。アメリカ占領下の奄美大島はもとより、沖縄島をふくむ南西諸島の島じまのことは、皆目事情がわかりませんでした。

そんなとき、耳にしたのが、沖縄出身の地歴専修の先輩、その名は親泊千代さんのことでした。髪が黒く、うるんだ丸い瞳、いつも手踊りでみんなを笑わせ、琉球民謡をうたってくれた人、ひょうひょうとして屈託のない人、その方は、いまどうしていらっしゃるのか……。焼夷弾で焼けおちた護国寺寮を心に描きながら、私たち寮生は、その人の面影をうつろに追ったものでした。

1965年10月、アメリカ大使館でパスポートをもらいうけた私は、はじめて沖縄の地に足をおろしました。日本地理学会の沖縄巡検に参加したのです。会員は、2日目、南部戦跡に案内されました。20年前の摩文仁岳は残暑なおきびしく、山肌は南国の陽にぎらぎらと輝き、大地は焼け、屋台にみやげ物をならべた老婆の顔に、かつての戦いのはげしさが刻まれていました。戦士を弔う県碑も1つ2つと、ようやく建立されはじめた頃で、多くの洞窟が、沖縄戦の戦後を露呈していました。すでに映画「ひめゆりの塔」に、ふかく心打たれていた私は、さっそく第3外科戦跡をたずね、ひめゆり部隊の女子生徒のご冥福を祈りました。女子生徒は、私と同学年で、もし、本土が決戦場になっていたら、私とてどのような運命に遭ったかもしれない、こんなおもしろい身近に彼女らを悼み、ひたすら「ひめゆりの塔」へと私をむかわせたのでした。石碑にとどめられた殉死者の女子生徒の名を順に追って、そこに私は「親泊千代」の名を見出したのでした。県立第一高等女学校職員戦死者のさいごに、一瞬、ハット胸をつかれるおもしろがりました。たしか女高師寮でお名前をおききした方、その方が……。

親泊千代さんのクラスメート・辻千鶴さんは「伊原野に死す——ひめゆり部隊・親泊千代の霊に捧ぐ」(交陽社、1980年6月)で、「化粧らしいものを全くせず、やや浅黒い顔に濃い眉と潤んだような瞳をした」千代、「好きでたまらなく、ひとりでのる時も千代のことをおもう